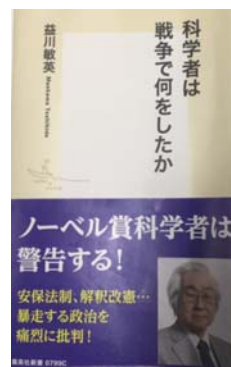


科学者は戦争で何をしたか

表題はノーベル賞科学者・益川敏英さんの集英社新書のタイトルだ。2015年8月の発行だが、11月末に早くも5刷と多くの人に読まれている。本書は益川さんの人柄が滲み出ており、硬いテーマだが、とにかく読みやすく引き込まれる。

ノーベル賞受賞の記念講演で「戦争」の話をしたのは、戦争体験を語れる最後の世代としての責務だから、と話は始まる。益川さんが5歳のとき、名古屋の昭和区にあった自宅に焼夷弾が落ちたが、不発弾であり九死に一生を得た。これが唯一記憶している戦争体験である。「5歳の時の記憶が再び現実のものとならないよう、本書では、科学者が大量に動員された戦争を振り返り、本来は平和に使われるべき科学が軍事利用されないためには、どうすればいいのか、微力ながら、その道を探ってみたいと思います。」



このあと、7つの章から構成される。1 諸刃の科学-「ノーベル賞技術」は世界を破滅させるか？ 2 戦時中、科学者は何をしたか？ 3 「選択と集中」に翻弄される現代の科学 4 軍事研究の現在-日本でも進む軍学協同 5 暴走する政治と「歯止め」の消滅 6 「原子力」はあらゆる問題の縮図 7 地球上から戦争をなくすには

この目次からも、益川さんのあつい思いと危機感、そして明日への希望が伝わってくる。とりあえず付箋をつけたところだけでも紹介しておく。

3章で STAP 細胞問題の根っこにある政治とカネを問題にする。「理研という非常に閉鎖的な環境の中で、彼女は予算を獲得する政治的な道具として使われたわけです。--- すべては金が絡んだ政治が引き起こした事件だと私は思っています。」科学政策の「選択と集中」、政治とカネに対する厳しい指摘だ。

4章の加速する軍学協同、産学協同について。「大学や民間の研究者の取り込みは、戦前・戦中の強制的な科学者の動員とは違いますが、資金援助というエサで研究者を釣るのは、ある意味間接的な動員と言えるのではないのでしょうか。」民生にも軍事にも使える「デュアルユース」問題に関連して、「科学と軍事が密接に結び付いている現代こそ、科学者の想像力、人間としての生き方が問われるのだと思います。」

とどのつまり、坂田昌一先生の「科学者である前に人間たれ」という言葉に戻る。「科学者には現象の背後に潜む本質を見抜く英知がなければならない」という坂田先生の言葉は、今も非常に重いものですが、理性を上手に働かせることができれば、人類は今後100年だって200年だって、戦争をせずにいられるはずです。

(2015年12月23日)